



1月給食だより

令和8年1月8日
江東区立深川小学校
校長 川辺 章絵
栄養士 小坂妃幸子

あけましておめでとうございます



冬休みが終わり、後期の後半が始まりました。昔から「一月往ぬる二月逃げ
る三月去る」といわれてきたように、年度末に向けて月日が流れるのを早く感
じる時期です。風邪やインフルエンザも流行していますので、体調管理には
より一層気をつけて、1日1日を大切に過ごしてほしいと思います。

今年(とし)はうま年!

うまのように野菜を
たっぷり食べよう!

箸を**うま**く使いこなして
きれいに食べよう!

よく味わって**うま**味
を感じよう!

お年玉はもち(もち)だった!?



お正月は、普段より日本文化を感じる機会が多かったのではない
でしょうか。さて、子どもたちにとって、お正月の楽しみといえば
お年玉。新年を祝って、大人から子どもへお小遣いを渡す風習です。
もともとは、お正月の「歳神様(年神様)」にお供えした「もち」を、歳神様からの贈り物として
分け与えたことが始まりとされ、「年玉」とは「歳神様の魂」を意味します。

1月11日は鏡開き

鏡もちを小さく割ってお汁粉などに入れ、無病息災を願っ
て食べる行事です。もちを小さくするのに、包丁など刃物を
使うのは武士の「切腹」を連想させるため縁起が悪いとされ、
木づちや手で割ります。また、「割る」ではなく「開く」とい
う縁起の良い言葉が使われます。



1/24~1/30は
「全国学校給食週間」です

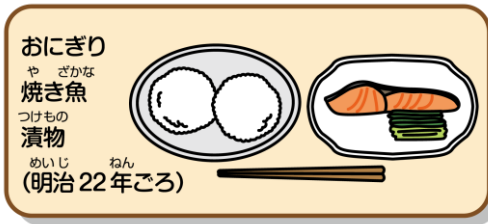
にほん がっ こう きゅうしょく

日本の学校給食のあゆみ

学校給食の始まり



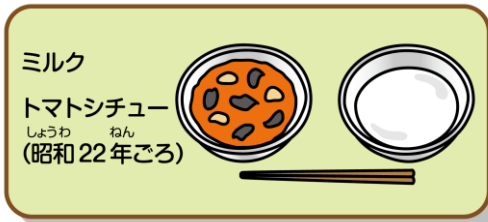
明治22 (1889) 年、山形県の私立忠愛小学校で、貧しい子どもたちへ食事を提供したのが始まりとされています。この学校は大督寺というお寺の中にあり、お坊さんたちが家々を回ってお経を唱え、いただいたお金や食べ物を使って食事を用意していました。大正12 (1923) 年には、子どもたちの栄養状態を改善するための方法として、学校給食が国から奨励されるなど、各地へ広がりましたが、戦争による食料不足で中止せざるを得なくなってしまいました。



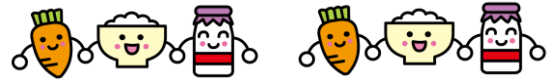
支援物資による学校給食の再開



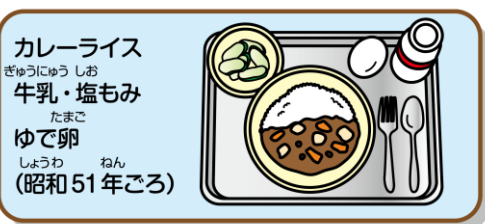
戦後、子どもたちの栄養状態の悪化を心配する声が高まり、昭和21 (1946) 年12月24日にLARA (アジア救援公認団体) から給食用物資の寄贈を受けて、翌1月に学校給食が再開されました。当初は12月24日を「学校給食感謝の日」としていましたが、その後、冬休みと重ならない1月24日からの1週間を「全国学校給食週間」とすることになりました。



バラエティー豊かな献立内容に



昭和29 (1954) 年に「学校給食法」が成立したことで、実施体制が法的に整い、学校給食は教育活動として位置付けられるようになりました。主食はパンが中心でしたが、昭和51年に米飯 (ご飯) が正式に導入されると、カレーライスや炊き込みご飯などが登場し、献立内容が充実していきました。



このように、学校給食の内容は時代とともに変化していますが、いつの時代も変わらずに、「子どもたちが飢えることなく、おいしく食べて、健やかに成長できるように」といった願いが込められています。現代では、大人になっても自分自身で考えて健康な食生活が続けることができるように、学校給食は「教材」としての役割も担っています。